Nadeshiko-no-Kai Report

東京学芸大学 附属小金井小学校 ● 同窓会

撫子の会

小学校は
エンピツの
匂い

会報 222 号

皆様のおかげで
第一グランドの
改修が完了しました

創立 110 周年事業の一貫として、長らく課題となっておりましたグランド改修が実現しました。費用の一部として皆様からのご寄付が役立てられています。

新しくなったグランドは、クッション性が高く安全なのに加え、水はけがよく、雨が降った後も短時間で乾き、すぐに使うことが出来るため、先生方や生徒の皆さんにも大変好評です。(P.2 塚本副校長のご寄稿参照)。

ご協力いただいた皆様に、心よりお礼申し上げます。

発行　2021.10

母校から

今年度の小金井小学校の取り組みについて

副校長　塚本博則

本校の教育目標は、「明るく思いやりのある子」、「強くたくましい子」、「深く考える子」の３点です。今年度も「違いを認め合う」(多様性の尊重) をキーワードに「明るく思いやりのある子」を重点目標に設定しました。具体的には、学校やクラスの中に児童一人一人の居場所があり、自らの存在を実感できるよう、様々な機会をとらえて児童が活躍する場面を作り、互いのよさを認め合える雰囲気づくりを大切にしています。

新型コロナウイルス感染症への対応は、最重要課題として取り組んでいます。感染力の強い変異ウイルスが広がっているため、基本的な感染症対策を徹底しながら教育活動を展開しています。しかし、４月第２週目から緊急事態宣言や蔓延防止等重点措置が継続しているため、１学期に予定していた４・５年生の一宇荘生活、３・５・６年生の至楽荘生活は中止を余儀なくされました。特に６年生は、昨年度も至楽荘生活が実施できず、鵜原の海で一度も泳がずに卒業することになり、残念でなりません。

小学校では、昨年度から新学習指導要領がスタートしました。３年生から「外国語教育」が始まり、３・４年生が週１時間の「外国語活動」、５・６年生が週２時間の「外国語」の授業を実施しています。本校では、英語教育が専門の中村教諭と学級担任が指導にあたっています。

プログラミング教育も導入されました。５年算数、６年理科、４年総合的な学習の時間の中でプログラミング教育を実施し、コンピュータがプログラムによって動き、社会で活用されていることを学習しています。それ以外の時間にも、各教員が創意工夫しながら取り組んでいます。

ICT の環境整備にも注力しています。各教室に電子黒板を設置し、文科省 GIGA スクール構想で校内無線 LAN や５・６年生一人一台タブレット PC を整備しました。附属学校全体で遅れている２～４年生のタブレット PC は、２学期に導入を予定しています。限られた予算の中ですが、工夫して整備を進めていきます。

撫子の会の皆様には、創立 110 周年記念事業に際して、多大なるご寄付をいただきました。ご寄付は第１グランドの改修費用に充てさせていただきました。新しいグランドは、黄緑色のゴムチップウレタン塗装となり、クッション性が高く、雨が降っても短時間で乾くため、使い勝手が非常によくなりました。

また、昨年度から卒業生への記念品として、裏面に撫子の会と印字された卒業証書フォルダーを寄贈していただいております。

このように撫子の会の皆様には、日頃より母校に対して多くのご支援をいただいております。心より御礼申し上げます。今後は、第２グランドの水はけが悪くなっているため、その整備を進めようと考えています。さらなるご支援をいただけますと幸いです。

コロナ禍の厳しい状況が続きますが、教職員が一丸となり、前を向いてこの難局を乗り越えていきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

学びを止めない Teams 活用

鈴木秀樹教諭
（東京学芸大学附属小金井小学校）

昨年の３月から５月までは、小金井小も他校同様、休校となりました。その間の手だてとして提案したのが「無料の Microsoft Office A1 ライセンスを取得し、Microsoft Teams を活用して学校と家庭を繋ぎ、学習指導を行いましょう」ということでした。

学校としては、普段から緊急連絡をメールで送信するサービスを利用していたので、恐らくどこの家庭にも何某かのインターネット接続環境はあるだろうという読みはありました。非常事態ですから、これを利用しない手はありません。パソコンでなくても、タブレットでもスマホでも何でもいいから、学校と家庭を繋ぐことさえできれば何とかなる。そう考えたのでした。

Teams を活用して学習支援を行う中から浮かび上がってきたのが、「Face to Face の教育から、学びの Side by Side へ」というコンセプトでした。

教室における教師と子供の関係を考えてみましょう。教室において、教師の存在は非常に大きいのです。教室で教師が話をすれば、子供たちは聞きます。指示をすれば、子供たちは従う。教師と子どもは Face to Face すなわち向かい合った関係にあり、この関係を生かして教師は子供たちに様々な働きかけを行って、クラスをまとめ、目標達成へと誘っていきます。

ところが、休校になった途端、教師は子供たちと学校で Face to Face で向き合うことはできなくなってしまいました。話をしようにも、指示を出そうにも、そこに子供たちはいないのです。この状況を打破するために、強引に子供たちを画面に集めて Face to Face を実現しようという同期型オンライン授業が脚光を浴びました。しかし、画面の中に集めたようでいても、そこでの教師と子どもたちとの関係は、教室と同じではありません。

教室であれば「上履きはちゃんと履きなさい。踵を踏みつぶしていてはダメだよ。」と注意できますが、オンラインでそんなことはできません。画面に映っているのは上半身だけ。もしかしたら下半身はパジャマかもしれません。いや、そもそもカメラをオフにされれば姿そのものが見えなくなります。そんな関係は教室では起こり得ません。

そうした中で、私たち教師は、Teams でメッセージを送りながら、ある時は意見を交換し合っているところに入っていって話し合いをファシリテートし、ある時は考えあぐねている子にヒントを出し、またある時は何もしていない子に声をかけていました。教室で子供たちがそんなにバラバラなことをしていたら、教師は対応しきれませんが、Teams を活用すれば教師は時間をずらして全ての子どもたちに関わっていくことが可能です。実際、本校の教員の多くは、子供たちが繰り広げる多様な学びに丁寧に寄り添うようにコメントをつけていました。Face to Face の教育から、学びの Side by Side に寄り添おうとする姿が見られたのです。

コロナ禍の様々な制約はあるものの、学校生活は通常に戻りつつあります。教室で展開されていることは、形としては Face to Face の教育に戻っていますが、教師の態度まで戻っているわけではありません。あの時に学んだ「子供たちの学びに Side by Side で寄り添う」という態度を持ちながら日々の教育に取り組んでいくことこそ重要と捉え、そのためにこれからも ICT を最大限、活用していきたいと考えています。

同窓生寄稿

新型コロナパンデミック：私はこう考える

WHO本部感染症ハザードシニアアドバイザー
小金井昭和51年卒　進藤 奈邦子

「まさかこんな世の中になるなんて、誰が想像したでしょう。パンデミックが全てを変えてしまいました。」

日本に住む親しい友人から、ジュネーブの私の手元に届いた去年暮れのクリスマスカード。次の文章に移ることができず、しばらくこの2行をじっと見ていました。少なくともこの20年あまり、私が仕事として積み上げてきたことの全てがパンデミックのためだったからです。

感染症の「地球防衛軍」とも言える私の同志たちもこの異次元感覚に苛まれながらこの一年あまりを過ごしてきたのではないでしょうか。津波のような仕事量に押しつぶされそうな毎日。自明ともいえる単純な感染防止の基本がどうしてわかってもらえないのか、実行できないのか、大きく脱線していくパンデミックの運命をなんとか軌道に戻すことはできないのか。動く標的を全力で追いかける日々。一日の終わりが近づくころ、人気のないエントランスホールを横切り執行理事会会議室に入ると、煌々と照明に照らされて今日もカメラの前で静かにプレスカンファレンスに臨むテドロス事務局長が見えます。WHOのジュネーブ本部で最大の執行理事会会議室です。木をふんだんに使ったこの巨大な空間は、高い天井から自然光のような照明が降り注ぎ、吸音素材のおかげで静寂なことこの上ありません。後方の椅子に身を沈め、正面に掲げられたWHOのエンブレムを見上げ、静かなテドロス事務局長の声を聴き、気持ちを落ち着かせて元気をもらい帰途につきます。

地球防衛軍と言いましたが、私たちが目立たず取り沙汰されないほうが地球は平和だということです。取り沙汰されていないときに着々とパンデミックの準備をしていました。いえ、している「はず」でした。パンデミック対策の成功は9割が準備にかかっています。過去のアウトブレークデータと様々な指標を組み合わせ、いわゆる新興・再興感染症の「ホットスポット」を割り出し、それらホットスポットに照準を合わせて準備を積み重ねてきました。また、新型インフルエンザの世界流行に備え、パンデミックインフルエンザ枠組み条約(PIPF)を作り地球規模の準備を進めてきました。2014-15年に起こった西アフリカのエボラウイルス病（旧名：エボラ出血熱）の大爆発では、危険感染症が世界の危機管理問題として初めて国連の安全保障理事会にかかりました。パンデミック問題を政治のアリーナに持ち上げるために2017年にはGlobal Preparedness Monitoring Boardが設立され、世界に警鐘を鳴らしてきました。

母なる地球は、少しずつページをめくりながら、これから先、何が起こるのかを教えてくれていたと思います。1997年香港での最初の鳥インフルエンザ(H5N1)の人感染、2002-3年の重症呼吸器症候群SARS、2004-5年ふたたび大規模になってもどってきた高病原性鳥インフルエンザ（H5N1)、2009年新型インフルエンザパンデミック（H1N1)、2012年中東呼吸器症候群MERS、2014-15年西アフリカエボラウイルス病、2015-16年ジカ熱、2017年鳥インフルエンザ(H7N9)。アジア、特に中国南東部はもっともパンデミックの起源となる可能性が高く、中国およびその周辺諸国は真剣にパンデミック準備策に取り組んできましたし、世界銀行をはじめ多くのドナーエージェンシーが投資して下さいました。その結果、アジアは他の地域に比べ、COVID-19に強固な体制で立ち向かうことができました。米州や欧州は対岸の火事と思ってはいなかったでしょうか。

WHOは、現在でもCOVID-19は対応次第でパンデミックにならなくて済んだと真剣に考えています。テドロス事務局長は2020年3月にCOVID-19の状況を「パンデミック」と表現しました。もう覆水盆に返らずの状況になってしまったからです。WHOがパンデミック宣言をしなければならない感染症は、当時も今もインフルエンザだけです。パンデミック宣言により、PIPFで約束されたパンデミックワクチンの製造にスイッチが入り、自国の経済力では対応できない低中所得国に抗インフルエンザ薬やパンデミックワクチンの無償、あるいは割引供与が始まる取り決めができているからです。もともとパンデミックは誰かが宣言したからパンデミックなのではなく、現象（Phenomenon）です。ある病原体が引き起こす感染症が世界的に拡散し、健康被害を起こす状況を言い、たとえばHIV（エイズの原因ウイルス）は潜在的にパンデミックになった感染症の一例です。WHOは国連の健康に関する専門機関であって、その最高の意思決定機関は194の加盟国代表で構成される世界保健総会です。その世界保健総会が満場一致で採択した世界保健規約に基づいてWHOが宣言できる最高レベルの警報はPHEIC(Public

Health Emergency of International Concern, 公衆衛生上の国際緊急事態宣言）であって、その宣言は2020年１月末にすでに発令されています。この時点ですべての国で緊急対応がされるべきでした。３月のパンデミック承認は、欧州、米州それにイランでの感染爆発により、パンデミック封じ込めがほぼ失敗に終わったとの初めの敗北宣言にほかなりません。

地球温暖化、森林伐採、国際紛争、飢餓、都市化など高度に発達し、多様化した国際交通・交易。すべてが新興感染症の発生を促し、爆発が起こりやすい土壌を作っています。WHOの統計によると、一年間に約170余りの「パンデミックの芽」が発生していて、約５年に一度は感染症による顕著な社会的現象が観察されています。COVID-19はそのうちの一つであって、パンデミックはこの先起こるかどうかではなく、いつ起こるか、が問題なのです。もともと人の病原体でない微生物（人間以外の動物や環境に存在している）が人間を宿主として生き延びようとするとき、必ず始めは非効率的な現れ方をし、感染が爆発することによって多くの遺伝子変異が起こり、より感染しやすいものに変異していきます。個体として脳を持たない微生物は数と確率試行で脳の機能を代替して生き残りを目指します。個体として最も発達した脳を持つ人類が、その知恵を統合して勝てないはずがないのです。ただ、人間には社会があり、習慣があり、人々の信念と欲求があります。この裏をかいてくるのが、脳を持たないけれども群として生存繁栄を目指す微生物の賢さなのです。COVID-19の病原体コロナウイルスは、人間が社会的動物であることに目をつけ、パンデミックになることに成功したのです。２１世紀は何事もExponentialな世紀です。足し算でも掛け算でもなく、指数関数的に変化が起こる時代です。しかし、まだAIにすべてを任せられるところまでは来ていない。「基本」ができていなくてテクノロジーに頼った国はCOVID-19を抑え込めなかった。携帯アプリでは日本の保健所のスタッフ、保健士さんたちが身骨砕き、心血注いで取り組んだ丁寧な前向き・後ろ向き接触者調査の代わりはできなかった。COVID-19の病原体はクラスターを作ることで広がっていったけれど、クラスターなしには逆に広がれなかった。この基本中の基本、真骨頂を絞り出してくれた日本の専門家チームに世界中が拍手を送りました。そして絞り出された三密。今３CとしてWHOも世界に発信しました。ところが、これらを実行できる国の数は限られており、制御不能な感染爆発が各地で発生しました。これらの感染爆発はいずれもより感染力が

強いとみられる「変異ウイルス」を生みだすことになります。今度はワクチン。抑え込めなかった感染爆発をワクチンをあたかも万能薬のように考えて、ワクチンを接種していれば証明書がもらえ、自由に行動できる。それが果たして正しい解決策だったのでしょうか。このワクチンはあくまでも緊急対応のワクチンであって、重症化と死亡を減らすことが最大の目的です。新しいプラットフォームで作られたワクチンで、その効果や中長期的健康被害はまだまだこれから議論されていかなければなりません。今後も新しく発生した変異ウイルス感染に対する有効性や、免疫の持続期間など十分に動向を見守る必要がありますし、抗ウイルス薬の開発、承認、備蓄も急がなければなりません。より簡便で精度が高く、安価な診断技術も確保する必要があります。ワクチンはあくまでもトランプでいう手の内のカードの一枚で、ほかにも強いカードをそろえ、またそれらのカードを組み合わせて勝負しなければ勝つことはできません。切り札は使い方を間違えると切り札の役割を果たせないということです。

今回、当初から実際の感染症によるパンデミックと、情報のパンデミック「インフォデミック」が並行して起こったことも特筆すべきです。ソーシャルメディアにより誤情報や風評が流布し、パンデミック対応を困難にしました。サイエンスと政策も今までのようにはすんなりつながりません。国民の政府に対する日頃の不信感が情報源の多様化と相まって「何が真実なのか」わからない不安な状況を作り出しました。真の専門家が現場の対応や対策立案で忙殺されるなか、にわか専門家がメディアでまことしやかに誤情報を流すということも頻繁に見かけられました。行動や集会制限で致命的打撃を受けた業界もあれば、パンデミックのためにけた違いな利益を上げた業界もあります。ウイルス本来の影響以外の動きが大きな社会現象となりパンデミックの運命が決まっていったのです。これらの「要因」（あるいはビッグトレンド）を見極め、近い将来COVIDがどうなっていくのか、未来を考え、すべての重大なリスクを洗い出し、あらかじめ対策に向けて準備していく。それが私たちの今の最大かつ緊急のタスクなのです。

会長挨拶

「今、すべきことへ一歩を踏み出すこと」とは

「撫子の会」会長
小金井昭和51年卒　野久尾 悟

皆さまお元気でお過ごしでしょうか。長引く新型コロナウィルス感染への対応で不自由で気分の晴れない毎日を過ごされている方々が多いのではないかとお察し申し上げております。

さて、「撫子の会」は、皆さまのご理解ご協力を得て、完全リモートによる理事会の実施と書面による総会決議とさせていただくことで、活動を続けております。

母校周年事業については、ご理解をいただき多くのご寄付を賜りましたことで第一グランドの改修等に充当することができました。あらためて、心から御礼申し上げます。

現在、「撫子の会」は、私が会長を拝命いたしました際に公約した通り、次世代に繋げていける持続可能な組織へと改革すべく理事の皆さんと前向きかつ活発な議論を重ねております。完全ボランティアで何の報酬もない理事の皆さんには少し酷なのですが、未来の撫子の会のため、そして母校の明日のため、「今、すべきことへ一歩を踏み出す」よう、いつもお願いをしています。

例えば、皆さまとの双方向のコミュニケーションツールを目指したホームページ改編へのトライアル、母校にご協力いただきながらの会員情報管理の精度アップへの対応もスタートさせました。また、母校行事への支援、母校そして皆さまの記録と記憶を次世代へと引き継ぐためのアーカイブ事業の検討など新たな取組みも開始しました。

母校の歴史や伝統、慣習といったそもそも形をもたないものやデジタル化以前に散逸しつつある資料をどのように保管・維持していくのか。そのための資金はどのように確保するのか。それ以前に、そうしたものを次世代に繋げていくことの重要性、価値とは何なのかを明確にしていき、皆さんとの共通認識としていきたいと考えております。

コロナウィルスは、世の“あたりまえ”の中から見落としていた側面、気が付かなかった側面を奇しくも顕在化させたと思っています。どのようなものにも、意外な脆さや危うさ、手をかけてやらねば枯れてしまうような儚さがあるのだと。私たち卒業生が大切にしている母校の歴史や良き伝統などは、この範疇にあるのではないでしょうか。

母校が豊島小学校・追分小学校・小金井小学校と脈々と培ってきたものは、必ず次世代にとっても価値のあるものとなっていくことを私は信じて疑いません。それらをカタチにして新しいICT技術等も駆使しつつ、継承していくためには、どのようにしていくべきなのか。引き続き検討してまいります。

今回の会報には、前号でご紹介させていただいた母校でのICT教育を推進されている鈴木秀樹教諭と、今まさに新型コロナ対応の渦中にあってWHOで活躍中の同窓生進藤奈邦子さんに、お忙しい中、ご寄稿をいただきました。コロナ禍にあって、教育と医療の最前線で今、起きていることをダイレクトに伝えていただこうと考えました。皆さまにとって、日々の生活の中での何かの気づきになれば幸いです。

“あたりまえ”があたりまえでは無くなっていく今日においても明日を創っていくのは、私たちです。

「今、すべきことへ一歩を踏み出す」ことができれば未来はより良い方向へと変わっていくでしょう。まずは一歩踏み出す、そして挑戦し続ける、その勇気を私は持ち続けていきたいと考えています。

撫子の会「公式会員専用サイト」開設のお知らせと皆様へのお願い

この度「撫子の会」は、①リアルタイムな情報提供、②会員による簡単で確実な会員情報の更新、③ペーパレス化の促進などの目的を実現するため、「撫子の会・公式会員専用サイト」を設置しました（これまでの会員以外もアクセス可能なホームページは便宜上「撫子の会・公式ポータルサイト」と呼びます）。

主な掲載情報は、①最新の会報および過去の会報アーカイブ、②学校・会員・恩師の皆様に関する最新情報、③イベント情報及びカレンダー、④イベント写真などを予定しています。

同会員専用サイトを閲覧するためには、会員登録が必要です。会員の皆様におかれましては、下記の登録手順によりご登録が可能ですので、お手数ですが是非ご登録をお願いします。

公式会員専用サイト・トップページのイメージ

【会員登録手順】

1. 右の QR コードを読み取るか、またはブラウザアドレスバーに〈https://miitus.jp/t/nadeshikonokai/〉と入力してログイン画面を呼び出す。
2. 「新規入会登録」を押して入会登録フォームへ。
3. 氏名とメールアドレスを入力して「送信」ボタンを押す。事務局よりメールが配信されます。
4. メールに記載された URL にアクセスし、入会登録申請手続きを行います。
5. 登録申請フォームに必要情報を記入し、申請を行ってください。
6. 数日後、事務局より入会承認メールが届きます。届き次第、表示された団体ページ URL にアクセスすると、公式会員専用サイトにログイン可能になります。
7. 登録したメールアドレス、パスワードを入力してログインしてください。
8. ログインしたら登録名を確認し、右上の「マイページ」ボタンを押してください。
9. 自身のマイページに登録した情報が反映されます。
10. 登録情報に変更があった場合は、「マイページメニュー」から各種会員情報が変更できます。

※詳しい登録手順は、「公式ポータルサイト」〈https://www.nadeshikonokai.jp/index.html〉に掲載の「撫子の会・公式会員専用サイト登録マニュアル」をご覧ください。

【本件に関するお問い合わせ】

撫子の会お問合せフォーム：https://miitus.jp/t/nadeshikonokai/inquiry/

第 13 回撫子の会総会・書面開催議決結果のご報告

昨年第 21 号会報にてお知らせしました通り、第 13 回撫子の会総会については、新型コロナウィルスの感染拡大の防止のため、書面による開催とさせていただきました。
皆様からのゆうちょ銀行払込取扱票、FAX、郵送、メールによる投票の結果、

・第 1 号議案：収支決算報告承認の件　　賛成多数により可決されました
・第 2 号議案：役員の選出の件　　賛成多数により可決されました

なお、本議決結果を受けて 2021 年 1 月 16 日理事会を開催、下記の通り会長、副会長を選出致しました。

会　長　野久尾 悟（小金井 昭 51）
副会長　川田 紀雄（小金井 昭 41）、副会長　吉田 朋弘（小金井 昭 58）

また、本議決にて役員に選任された神田 薫氏（小金井 昭 46）は、本人都合により退任申し出があり、これを受理しましたのでこの場を借りてお知らせいたします。

会員各位のご理解とご協力に、心から感謝申し上げます。

収支決算報告（2020年４月1日～2021年３月31日）

A. 収入の部

科　目	金　額
・前年度繰越金	14,879,921
・入会金	870,000
＊ 2021 年度 3 月卒業入会者／ 87 名	
・寄付金	1,631,663
・受取利息	19
合計	17,381,603

B. 支出の部

科　目	金　額
・会報 21 号印刷郵送費	1,324,941
・総会懇親会費	0
・HP 維持費	37,495
・事務費	50,821
・慶弔費	5,654
・池袋記念碑改修費	126,576
・母校創立記念事業への寄付	2,000,000
・次年度繰越金	13,836,116
合計	17,381,603

ご寄付の御礼とお願い

「撫子の会」の運営は、主に小学校卒業時の新入会員からの入会金と、皆さまからのご寄付でまかなわれています。昨年度は母校百十周年記念事業支援とあわせ、皆様からの温かいご寄付を賜りましたこと、心から御礼申し上げます。

一方でご承知の通り、大学の国立大学法人化のあおりを受け、附属学校は年々予算が削減され、生徒数も削減されており、その結果、当会の入会金収入も従前に比べ 35% もの減収となっています。

本年度も当会の運営財源はもちろんのこと、母校の現役生の皆さんへの支援金につきましても、皆さまからのご寄付へのご協力を心よりお待ちしております。

ご寄付にあたりましては、同封のゆうちょ銀行「払込取扱票」をご利用ください。

皆さまのご寄稿をお待ちしています！

皆さんと創る会報を目指しています。クラス会や同窓の仲間の集い、伝え残しておきたい母校の思い出話など何でも結構です。また会報に対するご感想やご意見もお待ちしております。「会報寄稿」「会報掲載希望」を明記の上、下記までお申し出ください。

メール：nadeshikonokai@gmail.com
郵送・Fax は巻末の同窓会事務局まで

卒業証書フォルダーを寄贈しました

６年間の思い出がつまった附属小金井小学校の卒業にあたり、撫子の会から令和３年３月卒業生に卒業証書フォルダーを寄贈、大変喜んでいただくと同時に、撫子の会の存在をアピールすることが出来ました。

また、これまでは卒業生が卒業関連費として他の費用とともに負担していましたが、撫子の会から寄贈により、その分を学校運営費に充てることが出来、学校側にも大変感謝されています。同事業は来年度以降も継続する予定です。

会員属性変更についてのお願い

会報の発行に並ぶ「撫子の会」の重要な事業・役割のひとつが皆様の会員情報の管理です。皆さまに確実に会報をお届けするためにも、会員情報に訂正・変更などがありましたら、この会報の巻末 P.10 の「登録情報変更依頼書」によりお知らせください。

詳しい記載方法、届け出方法は同依頼書の説明欄をご参照ください。

なお、新たに開設された公式会員専用サイトの「マイページ」で会員情報を変更された方は、同依頼書による変更の必要はありません。

また、皆様から頂いた属性変更が、次号の会報送付に反映される締め切りは、毎年度末（3 月末日）到着分までとします。

運営メンバー募集中

私たちと一緒に「撫子の会」を盛り上げませんか？撫子の会は、同じ学び舎で学んだ同窓生同士、多彩な年齢層・経歴の方々がボランティアで支えています。皆さん、並々ならぬ母校愛で取り組んで頂いておりますが、メンバーの固定化や高年齢化が進んでいます。母校への恩返し、社会貢献活動の一環として、ぜひ皆さんの力を貸してもらえませんか？

主な活動は会報の製作や総会・ぶらり同窓会の開催、卒業生の名簿管理などです。今後は様々な母校の記録や記憶を、後世に引き継ぐためのアーカイブ事業や、母校の現役生徒の皆さんや先生方を支える活動などを企画・検討しています。

年齢や経験は問いません。最近はリモート会議も浸透してきたため、遠方にお住まいの方でも参加可能です。ご興味がある方は、まずは下記までお問い合わせください！！

【連絡先】

メール：nadeshikonokai@gmail.com

郵送・Fax によるお申し出は巻末の同窓会事務局まで

撫子の会　会報22号

発行　2021（R ３）　年 10 月

発行責任者　野久尾 悟

印刷　（株）クラシブ

●投稿寄稿のお問合せ先

川田 紀雄（電話：042-324-9912）

野久尾 悟（電話：03-3720-8023）

●同窓会事務局

東京学芸大学附属小金井小学校内

〒 184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1

（電話）042-329-7823（Fax）042-329-7826

●撫子の会郵便振替口座

00100-8-709121　　加入者名：撫子の会

予　告　**10月30日（土）14 時より、リモート“ぶらり”同窓会開催 !!**
今年は、小金井小学校の今をリアルタイムで中継します。詳しくは、HP をご確認ください。

撫子の会・会員情報変更依頼書（メール・FAX・郵送用）

【ご記入方法】

A 枠内の会員番号（封筒整理番号）と会員氏名を必ずご記入ください。

次に B 枠内の該当箇所に変更・必要事項をご記入ください。

【送付方法と送付先】

ア) メールでの送信…本票をスキャン又は撮影の上、添付ファイルとして下記にご送付ください。

送信先：nadeshikonokai@gmail.com

イ) FAX での送信…必要に応じて本票を切り離し、下記にご送付ください。

送信先：042 - 329 - 7826（おかけ間違いの無いようご注意ください）

ウ) 郵送の場合…本表を切り取り、封筒に入れて下記にご送付ください。

送付先：〒 184 - 8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1

東京学芸大学附属小金井小学校内　撫子の会事務局宛（切手代はご負担ください）

A 枠	ご記入日	年　月　日
	会員番号 (封筒に記載の整理番号)	**※必ずご記入ください。**
	会員氏名	

B 枠	変更内容 (該当する項目に☑の上、右欄に変更される内容をご記入ください)	
	□ご住所	〒　－ 都 道 府 県　市 区 郡
	□電話番号	－　－
	□お名前	
	□ご逝去	ご逝去の時期　年　月　※わかる範囲でご記入ください。 会報・ホームページ等への記載について　□記載可能　□希望しない
	□郵便不要	事由をご記入ください。 □本人逝去のため　□その他（　）
	□その他 （連絡事項や会報への意見・感想、その他依頼事項など）	※本欄記載事項の会報・ホームページ等への掲載について □掲載してもかまわない　□掲載希望しない　□応相談により掲載可能